

フランス語の由来

「フランス」という名前は、ゲルマン民族の「フランク族」に由来しています。彼らは、紀元5世紀頃に現在のフランスを中心とする地域に侵入して「フランク王国」を築きました。ただ、国名とは違い、フランス語の起源は、ローマの言語だったラテン語です。

もともとこの地域はローマ人によって「ガリア」と呼ばれており、ラテン語とは歴史的に近い関係にあるケルト語の一派ガリア語を話す民族が居住する地域でした。このため、中世になっても、フランス語のことをラテン語では「ガリア語」と呼び続けていたくらいです。紀元前1世紀に、カエサルがガリア北部を征服したことで、程なくしてラテン語がガリア全土で話されるようになります。ローマ帝国が地中海世界にその勢力を保持している間は、ラテン語は帝国内でほぼ均質的な言語として機能していました。ところが、5世紀に西ローマ帝国が滅亡すると、各地のラテン語は急速に独立した変化を遂げるようになり、恐らく6世紀から7世紀には、フランス語、オック語、イタリア語、スペイン語などのロマンス諸語が成立していたものと思われます。

ガリアのラテン語は、いくらかはガリア語の影響を受けていたようです。ただ、ガリア語がどんな言語だったのかはほとんど知られていないので、影響がどんなものだったのかは正確には分かりません。ラテン語で [u] と発音されていた音が [y] という発音記号で表される音

に変化したり、数字の80を「4×20」という形で表すような例が、ガリア語の影響なのではないかと推測されている程度です。

「ガリア語なまり」のラテン語がもとになってフランス語が出来上がろうとした時期に、征服者としてやってきたのがフランク人です。フランク人たちが話していたのは、ゲルマン語の一種フランク語でした。フランク人たちは、ガリアのローマ人たちに対しては支配者だったものの、人口が少ない上に文化も遅れていたことから、自分たちのフランク語を捨てて、ガリアのラテン語を話すようになります。しかし、まさに新しく変わろうとしていたガリアのラテン語に、フランク語が影響を与えないことはありませんでした。戦闘用語のような語彙、ラテン語ではなくなっていた [h] の音の復活などが、フランク語の影響だと言われています。

こうしてようやく、7世紀頃には、ラテン語とも周辺の諸言語とも異なる、独立した言語としてのフランス語が成立することになります。フランス語という1個の言語が生まれるには、大本のラテン語だけでなく、ガリア語とフランク語という、同じインド・ヨーロッパ語族に属しながらも異なる言語が関わっているのです。近代では洗練された文化語として羨望的となるフランス語と言えども、その揺籃期には、ローマ文化を吸収する立場にある言語からの決定的な関与を受けていたわけです。

表紙写真 について

地球を体感する旅

高橋貞雄 Takahashi Sadao (玉川大学)

日本でもよく知られている「すばる望遠鏡」は、一般にはすばる天文台とも呼ばれているが(正式名「国立天文台ハワイ観測所」)、ハワイ島のマウナケア山(標高4,205m)の山頂付近に立っている。

ハワイ島は日本との縁が強く、今なお日本の名残が島のあちこちに色濃く残っている。私はそうした日本文化の足跡を辿りつつ、この機会にすばる望遠鏡をこの目で見ておきたいとかねがね思っていた。私はまだ日本の最高峰である富士山にも登ったことがないので、マウナケア山への登頂は文字通り未知への挑戦であった。

山頂までは四輪駆動車でガタガタと埃を巻き上げながら向かった。しかし、車で行くとはいえ、直接山頂まで行くと高山病になる心配があった。そのため、登頂の途中の「オニツカセンター」(標高2,800m)でしばらく休養し、1時間ほど体を高度に慣らす必要があった。センターには、1986年にスペースシャトル・チャレンジャー号の爆発事故で亡くなったハワイ島出身の日系宇宙飛行士・鬼塚承次氏の胸像があり、感慨を深くした。

太陽が西の彼方に傾きかけたころ、やっと天文台の近くにたどり着いた。頂上付近はとにかく寒

かったが、そこから夕日に染まる地平線を眺めていると、地球が回転していることを肌で実感することができた。この地球は何なのか、そして自分は何なのか、とことばなく想う数分間であった。夕日が沈んでからしばらくして、標高4,000m付近まで戻り、今度は満点の星空を観察した。ガイドの方がレーザーを照らして説明してくれると、光がその星まで届くようにも見えた。今回の旅を通して、地球と宇宙を体感し、そして自分が生きていることを感じ取ることができた。

